

『源氏物語の贈答歌における呼応関係』

富永（松下）直美

I、はじめに

物語において、贈答歌はその場面場面における登場人物の心情を表わすものとして、また話の筋の展開上、大変重要な意味をなすものと考えられる。その為、贈答歌を解釈する際には、その心情の面での応答がとりわけ注目されているように思われるが、物語における贈答歌というものは、一般的な和歌と同じく、自然の文脈と心情の文脈という二つの文脈を併せ持つことがあり、故に、その両方の文脈における呼応関係を考えることが重要であると考えられる。特に、歌語の特性や構造を一つ一つ明確にすることで、その自然の文脈における贈答と答歌の呼応関係をはじめに考えることなくしては、心情の面での理解をすることは難しいのではないだろうか。

したがって、本稿は、物語の贈答歌とは、心情の面で呼応する以前に、まず自然の文脈における呼応関係が見られるということ、具体的に夕顔巻の贈答歌の例を見ながら、考察するものである。

II、二つの文脈について

まず、最初に述べましたところの、二つの文脈とはどういうものであるのかを説明したい。これは、『王朝和歌を学ぶ人のために』¹⁾の和歌のかけことばについての項で、本学の平野由紀子教授が指摘されるところであるが、『古今和歌集』四七〇番歌を例に、掛詞を媒介として、歌に「詠み手の心情」の文脈と「自然の景物」の文脈が同時にあることが提示されている。

聞く 起きて 思ひ
音にのみきくの白露よるはおきて昼はおもひにあへず
菊 置きて 日
消ぬべし
消ぬべし
消ぬべし

この歌は、「きく」「おきて」「おもひ」「けぬべし」の語が掛詞であることによって、次の二つの文脈を形成している。一つは、『尊に聞く人に恋をし、「夜は一睡もできず、昼は昼で、恋の悩みのために死んだように息も絶え絶えの状態』という詠み手の心情の文脈。もう一つは『夜の中に生じ、朝日がさすと消えてし

まう」露の情景』を詠んだ、自然の景物の文脈である。つまり、「二か所以上の掛詞の必ず一方は、「詠み手の心情」についての文脈をつくり、他方は「自然の景物」についての文脈をつくる。このように『古今和歌集』における掛詞は、けっして読者の恣意的な読みにかかせて多義性を拡張するものではなく、「心情」と「自然」の文脈を形成する二義がきわめて明確に指摘できると論じておられる。

これを受け、このような二つの文脈は掛詞に限らず、物語における暗喩を伴う和歌や贈答歌などにおいても広く見られるものではないかと、私に考察するものである。

III、夕顔巻冒頭の贈答歌

では、夕顔巻冒頭の贈答歌を例に見たい。以下、『新編日本古典文学大系』（小学館）より本文を引用する。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にももの申す」と独りごちたまふを、御随人ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしくうちよるぼひて、むねむねしからぬ軒のつまになど這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りてまるれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

(中略)

ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花
(中略)

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔

これは乳母の見舞いに訪れた源氏が隣家に咲く白い花を見て、旋頭歌の「うちわたすをちかた人にももの申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」の一節を口にしたところ、隣家の女君がその花を乗せた扇に「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」という歌を書いて寄こしたという場面であり、それに

対する源氏の返歌が「寄りてこそそれかとも見めたそ
かれにほのぼの見つる花の夕顔」である。

夕顔物語の発端となるこの夕顔からの贈歌は、『日本古典文学大系』（岩波書店）の現代語訳、「当て推量
で、源氏の君かどうも、私は見ます、白露が光沢を
添えて居る夕顔の花の如き、夕方の顔の美しい方を。」
や、また、『新編日本古典文学全集』の現代語訳「当
て推量にあの方かしらと見当をつけております。白露
の美しさで、こちらの夕顔の花もいっそう美しくなり
ます／《頭注》「白露の光」は高貴な光源氏を指す。」
のように、長く、夕顔が光源氏を言い当てた歌として
解釈されてきたが、夕顔の内気という人物形成と、女
の側から歌を詠みかけるといふ大胆な行為とに矛盾が
生じるとして、近年になって頭中将誤認説なども提唱
され、さかんに論争されるに至っている。

それらの諸説と頭中将誤認説の可能性については、
提唱者であられる黒須重彦氏の論²と拙稿³を参照頂け
れば幸いであるが、今回は省略し、ここではこの歌が
果たして車の主を言い当てたものであるのかという点
について考えてみたい。

まず、この歌の構造に目を向けると、この歌は清水
婦久子氏⁴によって、本歌である凡河内躬恒の歌、「心
あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊
の花（『古今和歌集』277番）」の表現構造のみならず、
和歌の伝統的世界をも倣って詠まれたものとされ、本
歌やその他の歌に見られる「心あてに」「それ」の用
例は、どれも歌中にある遮る景物、例えば躬恒の歌で
は白菊と同じ白い初霜になるが、その遮る・感わす景
物によって対象とするものが見定めがたい状況にある
世界を描いていると言われる。

また、この対象物の判別困難な状況設定は、「心あ
てに」のみならず「それ」という語に関しても見られ
る。藤井日出子氏の論⁵によって、紫式部集80番歌「卒
塔婆の年経たるが、まろびたふれつつ、人に踏まるる
を／心あてにあなかたじけな苔むせる仏のみ顔そと
は見えねど」や『源氏物語』以前の和歌の用例より、
「そ」・「それ」という語は、「ただ単に「ある物を特定
する」というのではなく、「二つがよく似通っている
ために、特定する物の見分けがつかない」状態におい
て、特定する時に使用され、「特定する語が、歌中に
含まれる」と指摘されている。更に、源氏物語作中和
歌に「それ」とあるもの、当該歌を除く全九例を検証
されておられるが、ここで私にも再度検討すると、や
はり同じような結果が導かれた。源氏物語より2例を
挙げる。

a、花散里巻 中川のほとりの女詠

時鳥の声 (自然の文脈)

ほととぎす言問ふ声は[それ]なれどあなおぼつかな

源氏の声 (心情の文脈)

五月雨の空

b、橋姫巻 柏木詠

命あらば[それ]とも見まし人しれぬ岩根にとめし

松の成長 (自然の文脈)

松の生ひすゑ

薫の成長 (心情の文脈)

まず a の歌は、久方ぶりに女を訪ねた源氏が自分を
時鳥になぞらえて詠んだ歌への女からの返歌である
が、「源氏の君のようですが」と暗示しているようで
ありながら、「それ」は歌中の語「ほととぎす言問ふ声」
を指し、それが変わらないとしている。つまり、源氏
を仄めかしながらも、それはこの時鳥の声によって暗
示されていると言える。そして、その声は五月雨の音
によってはっきりとは識別できない、という状況が詠
まれている。また、b の歌は、薫が弁の君より渡され
た文にある柏木の歌であり、生き延びて我が子薫の成
長を見たいとするものであるが、「それ」は「松の生
ひすゑ」を指しており、それが薫の生い先を意味して
いる。かつ、ここでも、「人しれぬ岩根」という、対
象を判別するのに困難な状況設定がある。

このような構造は他の用例においても共通して見ら
れるもので、「それ」という語は、心情の文脈におい
ては人物を暗喩していながらも、その人物を暗喩する
語は、心情的背景を持たない自然の文脈において指し
示す語（傍線部の語）と一致していることが言える。
なお、この、藤井氏によって、「特定する語が歌中に
含まれる」と指摘された点については、自身の再検討
の結果、「それ」という語は必ず歌中の一語を指示し
ており、指示する対象が二語に及ぶことや、歌中の一
語を媒体とせず二義に及ぶことはない、ということが
確認された。

また、破線部の景物によって対象の識別が困難な状
況設定がなされていることから、やはり、「それ」と
いう語は《紛らわしい状況の中で、対照を推測する
語》として用いられており、意図的に対象を言い当て
る・特定するといった意味合いは薄弱であることがわ
かる。

これを踏まえて冒頭の歌を構造的に解釈してみる

と、「それかとぞ見る」の対象は、自然の文脈では、「心あてに」から考えても露の光で紛らわしい中に咲く「夕顔の花」一語であり、「それ」が、心情の文脈において人物を暗喩しているとしても「夕顔の花」と一致するべきであるということがわかる。

花
心あてに「それ」かとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花
暗喩される人物

すると、当該歌を従来の車中の人物を言い当てた歌と見るには、「夕顔の花」が源氏、もしくは貴人を表象しなければならぬということになる。

では次に、その「夕顔の花」について考察したい。

この「夕顔の花」という歌語は、源氏か夕顔の女のいずれを指すのか、古注釈⁶より解釈の分かれてきたところであるが、果たしてこの「夕顔の花」は源氏のような高貴な人物を表象し得る歌語なのであろうか。

夕顔の花については、既に黒須氏をはじめとする研究者によって次の三つの指摘がある。第一に、『源氏物語』に先行する勅撰集や私家集、『枕草子』⁷を除く日記・物語文学に見られず、第二に、夕顔巻において三度にわたり卑しい評価がなされており、それは歌を差し出す女側の言にも見られるため、一方の歌中において貴人を表わすとは考え難い⁸。そして第三に、女の人物造形の基本となる景物であり、巻の名からして女の象徴であるということである。

そこで、『源氏物語』以降、和歌において「夕顔」はどのように受け継がれてきたのか検討を試みると、源氏以降に「夕顔」が詠まれる初出は、次にあげる『新古今和歌集』の藤原師実（1042～1101）の歌、もしくは源俊頼（1055～1129か）の自撰集『散木奇歌集』の歌であることがわかる。

『新古今和歌集』276番歌 藤原師実

ゆうがほをよめる 前太政大臣

しら露のなさけおきけることの葉やほのぼの見えし夕
がほの花

『散木奇歌集』354番歌 源俊頼

山がつのすどがたけがき枝もせにゆふがほなれりすか
ひすかひに

師実の歌は、従来「白露」に源氏を、「夕顔」に女君をあて、夕顔巻の情景を詠んだとされており、少なくとも「夕顔」が源氏や貴人を表象するとは捉えられていないことがわかる。また、俊頼の歌からは、「山が

つ」という言葉によって、身分の低い家に咲く花との見方が窺える。このような認識は、次第に受け継がれていることが横野直子氏の論⁹からも明白であり、氏は、『千五百番歌合』、『六百番歌合』での「夕顔」の詠まれ方について分析し、「夕顔が歌材として歌合の題に立てられたのは六百番歌合であるが、そこでは、十二首のうち六首が賤、二首が山がつとの取り合わせで詠まれ、残る四首のうち二首は夕顔の巻を下敷にしたものである。」と述べられ、この結果から、「夕顔は貴族的ならざるイメージを齎す花」であり、源氏よりは「女達の卑下した自称ととるべきである」と推論しておられる。このように、後代に渡る賤しい花との認識は、既に夕顔巻の歌もその価値観をもって詠まれたことを表すと推測され、よって、源氏はもとより、頭中将を想定したとしても、貴人を表象する花とは考えがたいものと言えよう。

以上のことより、つまり、「それ」の項において「心あてにそれかとぞ見」た対象は「夕顔の花」であり、「それ」が人物を暗喩するとしても「夕顔の花」となることが確定された以上は、この賤しい花である夕顔の花を、高貴な源氏の暗喩と捉えることは不可能であることが考察される。そして、暗喩とするならば、卑下した夕顔の女自身であるということが考えられる。

また、補足として、「白露の光」が源氏を表象し得るのかに触れれば、結論は否である。「光」によって源氏と言い当てているとする説もあるが、『源氏物語』において「光」が和歌・地の文共に源氏特有のものであるとは必ずしも言い難く、歌中に「光」のある用例全九例を見ても源氏を指す物は一例に過ぎない。また、地の文では手習巻の「山里の光」、橋姫巻の「立ち寄せたまふ光」等と、相手の身分を問わず来訪した客人を讃える表現として用いられていることがわかる。また、先の「それ」が指すものは歌中の一語に限るという考察によっても、「露の光」がたとえ貴人を表象していても、それによって貴人を言い当てたと捉えることは不可能と言える。

よって、再度まとめると、

- 1、「それ」は必ず歌中の一語（景物）を指す。また、歌において人物を暗喩する際は、その景物と人物が一致する。
- 2、「夕顔」は賤しいイメージの花で、貴人を表象し得ない。
- 3、「白露の光」も源氏を特定する語ではなく、相手を讃える語。

という三点より、この歌には、それかと見た「夕顔の花」によって車中の高貴な人物を意図的に言い当て

たという心情の文脈は見出し難く、まず、「白露の光によって判別しがたいが、夕顔の花であろうと見受けろ」という、自然の文脈が導き出され、源氏が旋頭歌で花の名を問うたことに呼応した、謙虚な返事である挨拶の歌ということがわかる。また、「夕顔」と「露」といった歌語の特性から、「夕顔」は卑下した夕顔の女自身と考えた方がふさわしく、「白露の光」も源氏と特定できる語ではないため、この歌に心情の文脈を見るとすれば、貴人の来訪を敬い礼讃したものであるということが導き出される。

故に、源氏の返歌も、従来の『新日本古典文学大系』の現代語訳、「近くに寄って見て誰それかと分かつたものですよ、黄昏時にぼんやりとご覧になったばかりの花の（花みたいに美しい）夕顔（夕方の顔）をね」というような、夕顔の贈歌を源氏と言い当てたものとする前提の上で、もっと側に寄ってよく見よと女への勧誘とした歌とは考え難いことがわかる。自然の文脈において、女が「白露の光で判別し難い花」を詠んだのに対し、源氏は「夕暮時なので確かにぼんやりとしか見えぬ。近寄ってこそ見えるのだろう。」と呼応した返事をしながら、また心情の文脈としては、夕顔を卑下した女自身と捉えて、「次には（源氏自身が近寄って）もっと近くで、どんな女性がよく見たい」と色めいた返事として返歌したものと考えられる。

以上より、この贈答歌には、二つの文脈における呼応関係が認められ、かつそれは、自然の文脈が成り立った後に、その歌の構造・歌語の指示するものによって、心情の文脈が理解できる、という関係にあると考えられる。

したがって繰り返しになるが、当該歌は、まず判別し難い状況における夕顔の花のやりとりが表層上の「自然の文脈」で呼応関係にあり、その上で、「心情の文脈」が対応する関係になっていると考えられるのではないだろうか。

IV. おわりに

これまで、夕顔巻のこの贈答歌は、夕顔が源氏を言い当て、また言い当てられたが為に、源氏も自分だと分からないように書体を変えて、もっと近寄って自分の顔を見てくださいという返歌をしたというような解釈が一般的であったかと思われる。また、それ故に夕顔物語の発端としての面白みがあると言えるものかもしれない。しかし、物語の筋ばかりを先行して期待

される解釈を施すのではなく、歌語の一つ一つや、歌の構造、贈答の呼応関係をよく調査することによって、贈答歌というものは、より本質的な解釈が施されるものではないかと考える。

注

- 『王朝和歌を学ぶ人のために』（後藤祥子編／世界思想社／平成9年）
- 黒須重彦『夕顔という女』（笠間書院／昭和50年）、『源氏物語私論』（笠間書院／平成2年）、『源氏物語の実相—漢文学の内在化—』（笠間書院／平成8年）
- 拙稿「源氏物語 夕顔巻の贈答について—「心あてにそれかとぞ見る」新見—」（『国文』第93号／平成12年7月）
- 清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（和泉書院／平成9年）
- 藤井日出子「『源氏物語』夕顔巻—「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」をめぐって—」（『解釈学』／7号／平成4年6月）
- 『花鳥余情』（1472年成立）「夕貌はいやしきかきねに咲花なれば女も我身にたとへていへり」
『萬水一露』（1575年成立）「此歌源氏に思ひあてたると云心也いま見まいらせたる事はなけれどしるき御かたちと也夕顔をかほの心に下にもたせたる也」
『源氏物語玉の小櫛』（1792年成立）「夕兒の花にたとへて、今夕露に色も光もそひて、いとめでたく見ゆる夕兒の花は、なみへの人とは見えず、心あてに、源氏君かと思奉りぬと也」
- 『枕草子』六五段「夕顔は、花のかたちもあさがほに似て、言ひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそいとくちをしけれ。など、さは生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔と言ふ名ばかりはをかし。」→「ぬかづき」とはホオズキのことで、それ以下と言われており、評価が低い。
- ①随人の言、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける②源氏の言、「口惜しの花の契りや」③扇を差し出しす女童の言、「枝も情なげなめる花を」
松尾聰「夕顔の巻「それかとぞ見る」の歌をめぐって」（『文学』／昭和57年11月）
「歌の詠み手が、もしその歌の中で「夕顔の花」には高貴な人を擬しておきながら、一方ことばでは「枝も情なげなめる花を」と女童に言わせたとするなら、つじつまが合わなすぎるであろう。」
- 横野直子「夕顔巻贈答歌私解」（『国語国文研究』／昭和53年2月）